



長谷川 博

HASEGAWA Hiroshi

大林組
専務執行役員 大阪本店長

うめきたに見る 21世紀の都市開発



20世紀は、都市にさまざまな機能が高度に集積した時代でした。わが国においても、急増する都市の人口に対応するため、交通インフラや上下水道、住宅といった都市基盤が次々に整備され、他方で都市環境も格段に改善しました。私は昭和40年代に入社しましたが、そのころ、会社近くを流れる土佐堀川なんかひどく汚れていました。この40年余りで下水が整備され、工場排水の規制も相まって、ずいぶんきれいになりました。大気汚染も同様ですね。今や大阪は、世界トップレベルの安全かつ快適な都市になったのではと思います。

一方、21世紀はネットワークの時代。世界規模で人・資源や情報の流動性が高まるなか、上海やシンガポールをはじめアジアの主要都市は世界中から人材や投資を呼び込むべく、都市づくりに一所懸命取り組んでいます。片や、都市基盤が成熟した日本では、大がかりな都市改造は簡単ではありません。そこで、既存の都市機能の更新や都市基盤の高度利用などによる“再都市化”を官民一体となって推進することが必要だと考えています。交通インフラや環境への配慮といったハード面の都市基盤、情報の集積や文化といったソフト面の都市機能、これに加えて人々の交流を促進するマネジメント機能が整った都市が、今後の都市間競争を優位に進められると思うのです。

さて、そんな時代に新しい都市の形を示しつつあるのが“うめきた”、開業から1年を迎えたグランフロント大阪です。当社も、12社事業体の一員としてかかわっていますが、これまでのまちづくりとは一線を画す開発が進められてきました。

かつて都市開発というのは、戦災や自然災害から都市を再生させることであったり、もう少し狭いエリアにおいては、

有力企業や篤志家などが立派な建物を建てるなどしてまちの景観をつくるといったことが主であったといえるでしょう。しかし、うめきた1期開発にあたっては、基盤整備の段階から市民や市場のニーズやウォンツを取り入れながら、産学官が協働して計画的なまちづくりを進めてきました。結果、多様な人々の交流を通じて新しい事業を創出する触媒としての機能を持ったナレッジキャピタルが実現しました。なかでも会員制の交流施設、ナレッジサロンの会員数は初年度目標をはるかに超え、国際交流も活発に行われています。グランフロント大阪は、産学官が都市の「機能」を考えアイデアを出し合ったという点において、非常に画期的で意義深い開発だといえますね。

うめきた2期区域については、現在、まちづくりの方針が議論されているところです。都市のアメニティを高める「みどり」の確保を前提とした検討が進んでいますが、単なる公園や緑地ではなく、1期開発とも整合性をもった都市空間にするべきでしょう。また、国家戦略特区の中にしっかりと位置づけられる施設や機能を導入し、関西地域の成長につなげることが大切です。

うめきた開発は、御堂筋、中之島、ミナミといったエリアの都市基盤や都市機能の更新を促すトリガーの役割も担っています。一方で、これらの地域だけが活性化し、往時の大阪の中心としてにぎわいを見せた堺筋、谷町、松屋町といったまちが、その狭間で疲弊してしまうというのではいけません。大阪全体の活性化をかかるとともに、そのような「人の生活の匂い」のするまちにも配意して、官民が一体となって大阪、ひいては関西全体の魅力向上・発展につながる未来像を描き、推進していくことが必要ではないでしょうか。（談）